

フランス語の進行表現にみられる諸相（２）

— 中国語・日本語の視点から —

Some Aspects of the Progressive Expressions in French (2) : From the Point of View of Chinese and Japanese

成戸 浩嗣 Koji NARUTO

概 要

成戸 2013 においては、進行中の動作を表わすフランス語表現のうち、動詞の現在形を用いた表現、“être en train de+不定詞” 表現を中心として、中国語や日本語の進行表現を構成する諸成分・手段との間に存在する共通点・相似点や相違点を明らかにするとともに、進行表現を形成する過程において観察される各言語固有の特徴についての分析を行なった。本稿は、成戸 2013 の続編として、進行アスペクト形式であると同時にムード性を帯びている“être en train de+不定詞” について、同じく進行表現を構成する中国語・日本語の諸成分との比較検討を行なうことに加え、過去において進行中の動作を表わすことが可能なフランス語動詞のいわゆる半過去形についての考察を行なうことを目的とする。

キーワード

- | | |
|----------|------------------------|
| 1. 進行表現 | progressive expression |
| 2. 半過去 | the imperfect tense |
| 3. アスペクト | aspect |
| 4. ムード | mood |
| 5. 時制 | tense |

目 次

- 4 アスペクト形式に含まれるムード性
 - 4.1 “être en train de+不定詞”、「テイルトコロダ」のムード性
 - 4.2 “在V”、“V着”のムード性
- 5 半過去形による進行表現
 - 5.1 アスペクト性を有する時制の形式
 - 5.2 半過去形と“être en train de+不定詞”
- 6 まとめ

4 アスペクト形式に含まれるムード性

4.1 “être en train de+不定詞”、「テイルトコロダ」のムード性

成戸 2013 の 1.1 においては、現在形を用いたフランス語表現が“呢”を用いた中国語表現と同様に、コトガラに対する話者のムードを反映した結果とし

て動作の進行を表わすにいたった点について述べたが、“être en train de+不定詞”というアスペクト形式を用いた表現もムード性を帯びていると考えられる³⁸⁾。『フランス文法大全』: 281 には、行為の進行をはっきり表わしたい場合には“être en train de+不定詞”や“être à+不定詞”が用いられる旨の記述が、島岡 1990 : 191 には、継続を強調する場合

に“être en train de+不定詞”が用いられる旨の記述がそれぞれみられる³⁹⁾。これらの記述からは、“être en train de+不定詞”表現には、基準時点において動作が行なわれていることを確実に伝えたいという話者の意図が込められていること、すなわちムード性がみてとれる⁴⁰⁾。久松 2011:155 に、“être en train de+不定詞”は少々重苦しい言いまわしと感じられるため口語での使用頻度はそれほど高くなく、例えば“s’habiller(服を着る)”を用いて「彼は着替え中だ」、「彼は服を着ているところです」を表わす場合において

(62) Il **est en train de** s’habiller.

よりは

(62)’ Il s’habille.

と表現する方が多い旨の記述がみられることは、進行中であることをとりたてて述べる表現意図がない限り用いられないことを意味すると推察され、英語において進行中の動作を表わす場合に進行形の使用が義務的であるのとは対照的である⁴¹⁾。

一方、動作の進行を表わす日本語の「テイルトコロダ」においては、「トコロダ」が話者のムードを表わすとされる。寺村 1984:292 には、「Vテイルトコロダ」においてアスペクト(進行過程の段階)を表わすのは「Vテイル」の部分であって、「トコロダ」はムードの形式(どういうアスペクト的段階にあるかという状況を、話者がことさら言おうとする心理に出る表現)である旨の記述がみられる⁴²⁾。「～テイルトコロダ」は、寺村 1992:335 が「(「トコロダ」は)現在に焦点を当てるといふ含みを表わすのがその機能だと思う」としていることからみてとれるように、「今まさに～テイル」と同等の知的意味を有し、発話時点において動作が進行中であることを前提とする形式である点においては、成戸 2013 の 2.2 で述べた“être en train de+不定詞”との間に共通点を有する。このように「トコロダ」は、アスペクト形式「テイル」によって明示されている進行の意味をさらにとりたてる働きをすることが可能な成分であり、この点において、フランス語動詞の現在形や中国語の“呢”がムード的手段として進行表現を形成するケースや、“être en train de+不定詞”が進行アスペクト形式であると同時にムード性をも帯び

るケースとは異なるのである⁴³⁾。但し、「Vテイルトコロダ」形式全体を“être en train de+不定詞”と比較した場合には、両者は動作の進行を表わすアスペクト形式としての働き、動作が進行中であることをとりたてるムード性を帯びた形式としての働きを兼ねている点において共通しているということができよう。『ロベール・クレ仏和辞典(“train”の項)』が、“être en train de+不定詞”に対して「…している最中の／…しているところである」を対応させていることや、小熊 1993:140 に、“être en train de”、「トコロダ」をそれぞれ

(63) Qu’est-ce qu’il fait?

(63)’ 彼、何し**テイル**。

に対する返答として用いた場合、

(64) He **is writing** a letter.

のような進行形を用いた英語表現の場合とは異なって「強調」のニュアンスを有する感じがする旨の記述がみられること、さらには

(65) Il **est en train d’**écrire une lettre.

／あの人は手紙を書い**テイルトコロダ**。

(小熊 1993:139)

(66) Sandrine **est en train de** ranger la vaisselle sur l’étagère dans la cuisine.

／サンドリーヌは食器類を台所の棚に片付け**テイルトコロデス**。

(中村 2001:110-111)

(67) Je **suis en train de** préparer le dîner.

／今夕食のしたくをし**テイルトコロデス**。

(『プチ・ロワイヤル和仏辞典』「ところ」の項)

のような対応例が存在することは、いずれも“être en train de+不定詞”、「テイルトコロダ」がもつ上記のムード性に起因すると考えられる⁴⁴⁾。

ところで、「テイルトコロダ」は「テイル」によって明示されている進行の意味をとりたてる働きのほか、例えば

(68) 生徒たちが校庭に並ん**デイル**。

(68)' 生徒たちが校庭に並ん**デイルトコロダ**。

のように結果をとまなう動作を表わす動詞と組み合わせられた場合には、「動作の進行」、「動作の結果状態」のいずれを表わすことも可能な「テイル」の意味を前者に限定する働きをになうこととなる。すなわち、(68)は「並んでいる最中である」、「並んだ状態である」のいずれに解することも可能であるのに対し、(68)'は「並んでいる最中である」ことを表わすにとどまる⁴⁵⁾。このため、(68)'における「トコロダ」はムードのレベルにとどまらず、「テイル」の働きを動作の進行に限定するという点においてアスペクトそのものに関わる働きをしているということができよう。このことは、小熊 1993:170 が、一般には「(進行状態の)強調」、「近接(未来・過去)」と認知される「テイルトコロ」、「ルトコロ／タトコロ」の本質的機能はアスペクトとモダリティーの二つの領域にまたがるとしていることとも符合する。

4.2 “在V”、“V着”のムード性

“être en train de+不定詞”、「テイルトコロダ」の場合と同様に、中国語の“在(V)”、“(V)着”もムード性を帯びている。このことは、成戸 2013 の 2.1 で紹介した讃井 1996 a : 28-29 に、“在”は“呢”と同じく、英語の“be+～ing”のように進行表現専用に文法化された形式ではなく、中国語話者の語感では「主語がその時ある動作の過程もしくは状態の中に在る」ことを話し手が判断する意味の語であるのに対し、“-着”はある動作がすでに開始されていて今もそれが持続中であることを特に強調する場合に用いられる旨の記述がみられることや、同 1996 b : 56-57、同 2000 : 57 が、副詞“在”(=“在(V)”)の文法的意味ないし基本的機能を、話し手による意図的な「動作主およびその動作・状態のタイプの存在の前景化(特定の語句の意味に際立ちを与え強調すること)」であるとする一方、(“(V)着”による)持続体を「動作または動作の結果が持続している」ことを強調するアスペクトであるとしていることからもうかがわれる⁴⁶⁾。

このような見方によれば、“在(V)”、“(V)着”はそれぞれ動作の進行、動作の持続を表わす一方、話者が進行ないしは持続をとりたてて述べる表現意図がなければ用いられない形式であり、動作が発話時に進行中であると話者が認めるというムード的手段

によって成立する“呢”表現の場合とは異なった意味でのムード性を帯びていることとなる。従って、例えば

(69) Qu'est-ce qu'elle fait? / 她在做什么?
(《法语1》:76)

のように、動詞の現在形によるフランス語進行表現に対して“呢”を用いた進行表現ではなく“在(V)”表現を対応させることは、非進行表現として用いることも可能な上記のフランス語表現の性格に配慮し、非進行表現として用いられた場合に対応する

(70) 她是做什么的? (《法语1》:76)

との相違、すなわち、

(37) Qu'est-ce que vous faites (dans la vie)?
— Je suis étudiant(e).

の場合と同様に職業について問題とする

(69)' Qu'est-ce qu'elle fait?
— Elle est professeur.
(《法语1》:74)
(彼女はどんな仕事をしていますか。
— 教師です。) ※カッコ内日本語は筆者

における“Qu'est-ce qu'elle fait?”に相当する意味を表わす(70)との相違を際立たせるためであると推察される。また、

(71) Je **suis en train d'**écrire une lettre.
/ 我**正在**写一封信。
(《新简明法汉词典》“train”の項)

のように、動作の連続を前提とする“être en train de+不定詞”表現に対し、持続を前提とする“(V)着”表現ではなく“正在(V)”表現を対応させたケースも存在する⁴⁷⁾。“正”はコトガラを「ある一時点に位置する動作」として表現する働きを有する成分であり⁴⁸⁾、“在”と組み合わせられた“正在”は持続という意味特徴は有しないものの、基準時点において動作がまさに行なわれている最中であることを明示する点において“être en train de”との間に

共通点を有する。(69)、(71)いずれの対応例も、進行中の動作を表わす場合に用いることが可能であるという各形式の共通点を最優先した結果として成立するものであるということができよう。

5 半過去形による進行表現

5.1 アスペクト性を有する時制の形式

周知のように、フランス語動詞の半過去形は、例えば

- (72) Je **lisais** pour passer le temps.
(私は暇つぶしに本を読んでいた。)
(『現代フランス広文典』: 254)

- (73) Elle **écoutait** de la musique les yeux clos.
(彼女は目を閉じて音楽を聞いていた。)
(久松 2002 : 160)

- (74) Ce matin il **écrivait**.
(けさ彼は手紙を書いていた。)
(『現代フランス広文典』: 230)

- (75) J' ai vu Paul quand je **courais** dans la rue.
(町の中を走っている時に私はポールを見かけた。)(久松 1999 : 97)

※カッコ内日本語は筆者

- (76) Elle **cherchait** son chat ?
(猫を探していたの？)
(NHK2003年9月:40-41)

のように過去において進行中であった動作を表わすことが可能であり⁴⁹⁾、現在形とともに時制を反映した動詞の変化形の系列を構成する成分であると同時に、現在形の場合とは異なってアスペクト形式としての性格をも有するとされている。このことは、『現代フランス広文典』: 229-230、254-255 が直説法半過去形の用法の一つとして「過去における継続・進行」を表わすことを、「継続相」を表わす方法の一つとして未完了動詞⁵⁰⁾の半過去時制を挙げていることや、『フランス語学小事典(「半過去(imparfait)」の項)』が、半過去は過去における事態の継続や状態を表わす時制形式であるとする一方、そのアスペクト的な価値に言及していることによっても理解できよう⁵¹⁾。

『現代フランス広文典』: 254 の記述にみられるように、「半過去」とは「未完了過去(passé

non-accompli)」の意味であり、ある動作・状態が過去において継続的に行なわれていたことを表わすのがその主な働きである。同様に、『フランス語学小事典(「半過去(imparfait)」の項)』も、半過去は事態を一時点に位置づける時制形式とともに用いて事態の未完了を示すとしている⁵²⁾。但し、半過去形が有する「未完了」という特徴は、島岡 1999 : 624 が挙げている

- (77) Il arriva devant sa porte au moment où son ami **sortait**.

(かれがその扉の前に着いた時、友人は出かけるところだった。)

- (78) Ah ! j' **oubliais** le personnage le plus symbolique de l' arrière.
(ああ、後にいるもっとも象徴的な人物を忘れかかっていた。)

のような表現例にみられるように、動作が実現前の段階にある場合に用いることも可能である。半過去形が「未完了」という特徴をもって進行表現を形成する現象は、成戸 2013 の 1.1 でとり上げた中国語の“呢”を用いた進行表現が、「発話時において動作が未完成であると話者が判断する」ことによって成立する現象に通じるものがあり、「動作が終了していない」ことに着目して進行表現を形成するにいたった点において両者は共通しているということができよう。この反面、“呢”表現はムード的手段によって発話時における動作の進行を表わし、かつ話し言葉に限定して用いられるのに対し、半過去形は時制・アスペクト的手段によって過去における動作の進行を表わし、かつ話し言葉・書き言葉のいずれに用いることも可能である⁵³⁾という相違がみられる。

半過去形によって表わされる動作は、その起点・終点が問題とはされていないとされる。例えば、森本 1988 : 37 には、直接法半過去は、動作や状態がいつ始まっていつ終わったかを問題とはせずに、単にある過去の時点においてその動作や状態が持続していることを表わす旨の記述がみられる⁵⁴⁾。『現代フランス広文典』: 255 も同様に、半過去は過去の動作・状態を、その開始も終結も示すことなく、ただ継続・進行中の線行為(action-ligne)としてとらえる点において、過去の動作・状態を完了した点行為(action-point)としてとらえる複合過去とは異なるとし、前者の例として

(79) A midi, il **déjeunait**.

(正午に彼は昼食を食べていた。)

を、後者の例として

(79)' A midi, il **a déjeuné**.

(正午に彼は昼食を食べた。)

を挙げ、(79)は正午という時を基準としてその時に継続的に行なわれていた動作を表わしており、昼食はすでに始まっていたがまだ終わっていない、つまり未完了過去であるのに対し、(79)'は動作の開始から終わりまでを一つの点として示しており、昼食を食べ始めたのは正午であり、その行為がある時間の後に完了したことを表わすとしている。動作が続いていることを起点・終点を問題とせず表わす半過去形の特徴は、動作の持続状態を表わす中国語の“V着(zhe)”の特徴に通じるものがある。“V着”は半過去形とは異なって時制を反映しない非アスペクト形式であり、成戸 2013 の 2.2 で述べたように、この形式が表わす「動作の持続状態」は開始と終了との間に位置する動作の一過程ではなく、「動作結果の持続状態」と同様に動作によって生じた状態である。言うまでもなく「状態」なる概念には開始も終了もなく、起点・終点を問題としない半過去形との間に相似点を有することとなる⁵⁶⁾。

フランス語動詞の半過去形と中国語の“V着”との間にみられる上記のような相似点は、例えば、両者がいずれも状況描写に適した形式であるという形で観察される。島岡 1999 : 627-628 には、半過去が過去における未完了の行為を表わすというのは、現在の視点を過去に移すことであって、視点を過去の世界に移し、そこに立ってあたかも現在の世界にあるかのように観察し物語るのが半過去の基本的性格であり、これによって読者を物語の世界に引き入れることができる旨の記述がみられる。同様に、『フランス語ハンドブック』: 234 は、小説などの冒頭で頻繁に用いられる半過去形は、読者を一気に物語の現時点に引きずり込むものであるとして

(80) Le train **filait**, à toute vapeur, dans les ténèbres. (汽車は闇の中を疾駆していた。)

(81) Un grand vent **soufflait** au dehors …
(外では強い風が吹いていた。)

のような表現例を挙げている⁵⁶⁾。一方、中国語の“V着”については、『实用现代汉语语法』: 229-230 が“‘着’的作用在于描写。(“着”の働きは描写することにある)”として

(82) 赵永进静静地听着, 一声也不响。

(趙永進はじっとだまって聞いていて一言も言わなかった。)

(83) 交通艇嗖嗖地向前疾驶着。

(交通艇が音をたてて疾走している。)

※いずれもカッコ内日本語は『現代中国語文法総覧(上)』: 316-317

のような表現例を挙げているほか、“V着”は動作・行為の様態やすがたがどうであるかを凝視して描写する形式であるとする藤堂・相原 1985 : 76-77 の見解などが存在する⁵⁷⁾。

5.2 半過去形と“être en train de+不定詞”

過去において進行中の動作を表わす場合には半過去形のほか、“être en train de+不定詞”(“être”は半過去形)⁵⁸⁾を用いることが可能である。半過去形は動作の起点・終点を問題とせず、かつ時制とアスペクトが一体となった形式であるのに対し、“être en train de+不定詞”は動作の一過程としての進行段階を表わすアスペクト形式であり、時制とは切り離されている。両者の間にも、成戸 2013 の 2.2 で述べたような現在形と“être en train de+不定詞”との間にみられると同様の相違が存在し、後者には確実に動作が行なわれていたことを伝えたいという話者の表現意図が込められている、すなわちムード性がみてとれる⁵⁹⁾。このため“être en train de+不定詞”は、過去の特定時点において動作がまさに進行中であったことを表わす

(84) Elle **était en train de** faire la vaisselle.

(『フランス語ハンドブック』: 312)

(85) Ah, te voilà, j' **étais** justement **en train de** penser à toi.

(『ロベール・クレ仏和辞典』“train”の項)

のような表現に用いられることとなる。(84)、(85)に対しては

(84)' 彼女は食器洗いノ最中ダッタ。(=食器を

洗ってイルトロコダッタ。)

(『フランス語ハンドブック』: 312)

※カッコ内は筆者

(85)' やあ、君か、ちょうど君のことを考えテ
イタトロコナンダ。

(『ロベール・クレ仏和辞典』“train”の項)

のように、過去において進行中であったことをとり
たてて述べる形式、すなわち「ノ最中ダッタ=テ
イルトロコダッタ」、「テイタトロコダ」を用いた日本
語表現を対応させることが可能である。寺村 1992 :
335、小林 2001 : 24-25 の記述にみられるように、「テ
イルトロコダッタ」は過去のある時点において行為
が進行中の状況にあったことを表わす、すなわち過
去のある状況の中の一点を指すのに対し、「Vテイタ
トロコダ」は過去のある時点から今までずっと続い
ていた行為の継続状況を表わすという相違がみられ
る。この反面、両形式は、過去の特定点において
動作がまさに進行中であったことを前提として用い
られる点において共通しており⁶⁰⁾、必ずしも基準時
点において動作が行なわれていたことを要求しない
「Vテイタ」との間に一線を画す。

“être en train de+不定詞”が前述したようなム
ード性を含んだ表現形式であることは、同じく過去
において進行中の動作を表わす表現であっても、例
えば

(86) Il **était en train de** chanter.

(青木 1987 : 25)

(彼女は歌っていた／ているところだっ
た。) ※カッコ内日本語は筆者

は過去の特定点においてまさに歌っている最中で
あったことを表わすのに対し、

(86)' Il **chantait**. (彼女は歌っていた。)

※カッコ内日本語は筆者

は必ずしもそうではないというように、断続を許容
するか否かの点で相違がみられることによっても理
解できようし、『フランス語学小事典(「アスペクト
(aspect)」の項)』が、

(87) Quand je **suis rentré**, ma mère **était en
train de** préparer le dîner.

(私が帰宅したとき、母は夕食の準備をして
いた。)

においては複合過去によって実現の瞬間が特定の一
時点に位置づけられる“rentrer”に対し、“préparer”
という行為は“était en train de”によって持続的
に示されているとしていることとも符合する。

半過去形は、久松 1999 : 78 が

(88) Quand je lui **ai téléphoné**, elle **prenait**
une douche.

(私が電話したとき、彼女はシャワーをあび
ていました。)

においては電話をしたのが過去の点的な行為である
のに対し、シャワーを浴びていたのは線的行為であ
るとしているように、複合過去形と直接に比較した
場合には連続した動作を表わす形式としての側面が
際立つ⁶¹⁾。この反面、(86)' にみられるように動作
の断続を許容し、例えば

(89) Il **prenait** du vin à tous les repas.

(彼は食事のたびにワインを飲んでいた。)

(『現代フランス広文典』: 255)

(90) Elle **jouait** très bien du piano quand elle
était petite.

(彼女は若い頃、とても上手にピアノをひい
ていました。)(久松 1999 : 79)

のように、過去に反復して行なわれていた動作を表
わすことが可能である⁶²⁾。これらのことは、島岡
1999 : 623 が反復は継続の一種であるとしているこ
とや、『新フランス文法事典(“imparfait de
l'indicatif [直接法半過去形]”の項)』に、いわゆ
る継続相を表わす半過去の用法から「(過去の)反
復・習慣」その他の用法が派生するにいたった旨の
記述がみられることとも符合する。

フランス語動詞の半過去形は、時制が過去である
点を除けば、動作の断続を許容する点において、成
戸 2013 の 2.2 でとり上げた中国語の“在V”と共通
している。“在V”が過去の特定点においてまさに
進行中であった動作を表わすには、4.2 で述べたよ
うに、“正”をとまって基準時点において動作がま
さに行なわれている最中であったことを明示する

- (91) 他**正在**改学生的卷子, 校长走了进来。
(《實用英語語法》: 113)
(彼が学生の答案を見ていたら、校長が入って来た。) ※カッコ内日本語は筆者

のような表現方法が存在する。これに対し、動作の持続を前提とする“V着”表現においては、動作は時間的な幅をもったものとして表現される。このことは、村松 1988 a : 58 が、

- (92) 消邦死时候, 他夫人唱**着**歌。
(ショパンが死んだ時、彼の夫人は歌を歌っていた。)

における“-着”は、「ショパンが死んだ時(消邦死的时候)」を基準の時点として、それを含む一定の幅をもった時間、夫人が歌を歌い続けていることを表わしており、“-着”はある事象が基準時点(発話時点も基準時点の一つ)を含む一定の幅をもった時間、等質的に連続していることを示す形式であるとしていること⁶³⁾によっても理解できよう。このため、過去の特定時点において行なわれていた動作を、時間的な幅を有するものとして“在V”形式を用いて明示するのであれば、

- (93) 他进来的时候儿, 我**在写**着字。
(大原 1973 : 23)
(彼が入って来た時、私は字を書いていた。)
※カッコ内日本語は筆者

のように“-着”をとともなうこととなり、その場合には“être en train de+不定詞”により近い性格を帯びることとなる。

ところで、久松 2002 : 21-22、同 2011 : 282 の記述にみられるように、直説法半過去形は「未完了」の動作・状態を表わすのに使用されるため、「期間」を明示する表現(完了した時間を切りとった言いまわし)、すなわち起点と終点が明確な時間・期間を表わす成分とともに用いることはできず、そのような場合には

- (94) Il **a joué** de la guitare dans sa chambre pendant deux heures.
(彼は2時間部屋でギターを弾いていた。)
(久松 2002 : 22)

のように複合過去形が用いられるとされる。また、同 2011 : 282 には、半過去は期間があいまいな「未完了」に使われるのが原則であり、

- (95) Il **a habité** en France pendant dix ans.

において半過去形“habitait”を用いることができないのは、「10 年間」がひとまとめ(=点)としてとらえられており、起点と終点をはっきりしている期間(限定のある動作)で、「今は住んでいない」という完了の含みがあることによる旨の記述がみられる。(95)は過去の特定時点においてすでに完了した動作を表わしている点において、例えば

- (96) Elle **habitait** à Paris depuis 1980.
(久松 1999 : 80)
(彼女は 1980 年からずっとパリに住んでいた。) ※カッコ内日本語は筆者

のようなケースとは異なる⁶⁴⁾。ちなみに、フランス語動詞の複合過去形を用いた表現の場合と同様に、中国語においても、過去において一定期間続いていたが発話時においてはすでに完了している動作を表わす場合には“V着”ではなく、例えば

- (97) 我等**了**你两个小时。
(《英汉语比较语法》: 68)

のように、動作が完了したことを明示する“V了”が用いられる。

これに対し、日本語の「Vテイタ」には、フランス語動詞の半過去形にみられる上記のような制限はなく、(95)に対しては

- (95)’ 彼は 10 年間フランスに住ん**デ**イタ。
(久松 2011 : 282)

のような「Vテイタ」を用いた日本語表現を対応させることが可能である。同様の例としては

- (98) Maurice **a travaillé** (pendant) tout l’été.
(久松 2011 : 283)
(98)’ モーリスは夏の間ずっと仕事をし**テ**イタ。
(同上)

が挙げられる。(95)'、(98)'は、「テイタ」の部分
を「タ」に置き換えて

(95)"彼は10年間フランスに住ん**ダ**。

(98)"モーリスは夏の間ずっと仕事をし**タ**。

としても自然な表現として成立する。この点は(97)
のような中国語表現に対応する日本語表現の場合も
同様であり、

(97)'私は2時間あなたを待つ**テイタ**。

(97)"私は2時間あなたを待つ**タ**。

はいずれも成立する。このように、「(シ)テイタ」、
「(シ)タ」はいずれも起点と終点が明確な時間・期間
を表わす成分とともに用いることが可能であり、そ
れぞれ過去の特定時点において進行中の動作、完了
した動作を表わす。

6 まとめ

以上、フランス語において進行表現を構成する諸
成分・手段について、中国語、日本語において進行
表現を構成するそれらとの比較を行なった結果、以
下のような共通点・相似点、相違点が明白となった。

- ・動詞が継続可能な動作を表わすものである場合、
フランス語、中国語においてはそれぞれ現在形を
用いた表現、“呢”を用いた表現のようなムード的
手段による進行表現(非アスペクト表現)が成立す
るのに対し、日本語においてはそのような表現が
成立せず、進行を表わす場合には「テイル」のよ
うなアスペクト形式が不可欠である。

- ・“être en train de+不定詞”が表わす「進行」の
範囲は「テイル(トコロダ)」よりも広く、継続可
能な動作動詞と組み合わせられて進行中の動作を表
わすほか、動作が行なわれる直前の段階を表わす
ことや、継続性をもたない結果動詞と組み合わせ
られて進行を表わすことも可能である一方、“être
en train de+不定詞”は、意志的な動作を表わす
形式としての性格が「テイルトコロダ」よりも弱
い。“être en train de+不定詞”は“在(V)”、
「(V)テイル」と同様に進行アスペクトの形式であ
るが、前2者は進行中であることを話者がとりた

て述べるというムード性を帯びているのに対し、
「テイル」は帯びておらず、ムード性は「トコロダ」
によって示される。“être en train de+不定詞”
は基準時点において動作が進行中であることを条
件とし、この点は日本語の「テイルトコロダ/テ
イルトコロダッタ(テイタトコロダ)」、「(V)着”
も同様である。但し、“(V)着”は動作によって生
じた状態を表わす形式であり、動作の一過程を表
わすアスペクト形式であると断定するのは困難で
ある。

- ・フランス語動詞の半過去形は、アスペクト性を有
する時制の形式であって、過去において進行中で
あった動作を表わし、動作の断続を許容する点に
おいて動詞の現在形、“在(V)”、「テイル(テイタ)」
と共通する反面、“être en train de+不定詞”や
“(V)着”、「テイルトコロダッタ(テイタトコロ
ダ)」とは異なっている。半過去形は、「動作が終
了していない」ことに着目して進行表現を形成す
るにいたった点においては“呢”を用いた中国語
表現と共通する一方、“(V)着”との間には動作の
起点・終点を問題としないという相似点を有する。

フランス語においては、現在形あるいは半過去形
を用いた進行表現と“être en train de+不定詞”
表現とが相互に排他性を有するのに対し、中国語の
“在(V)”表現、“(V)着”表現および“呢”を用い
た表現の場合は必ずしもそうではなく、

(47) 我在写着字。

(48) 我(正)在给他写(着)信(呢)。

(93) 他进来的时候儿，我在写着字。

や、あるいは

(99) 他正在念书呢。(大原 1973 : 23)

(100) 我妻子现在做着饭呢。(船田 2003 : 139)

のように、複数の成分が併用されるケースが存在す
る⁶⁵⁾。この点は日本語における「テイル(テイタ)」、
「テイルトコロダ(テイルトコロダッタ/テイタトコ
ロダ)」も同様であり、アスペクトとムードがそれぞ
れ「テイル(テイタ)」、「トコロダ(トコロダッタ)」
により表わされるため、必ずしも相互に排他性を有
するものではない。このような相違がみられる一方

で、ムード的手段によって進行表現が形成される(現在形を用いたフランス語表現、“呢”を用いた中国語表現)ことや、空間表現を時間表現に転用した結果として進行表現が成立する(“être en train de+不定詞”、“在(V)”、“テイル(トコロダ)”)こと、動作が終了していない点に着目して進行表現が形成される(半過去形を用いたフランス語表現、“呢”を用いた中国語表現)ことのような、個別の言語の枠を越えた現象がみられるのも事実である。これらの現象が進行表現の形成過程におけるどの局面で顕在化するかは言語によって異なるものの、このような側面からの考察は、「進行」の概念規定からアスペクトそのものの概念規定⁶⁶⁾にいたるまでの厳密な記述を可能にし、ひいては総論と各論の関係にある一般言語学と個別の言語学の記述に資することにつながり、青木 1989 : 292 の記述にみられるような「一般的な文法範疇が各言語でどのように特殊化されるのかを見てゆく」ことともなるのである。

“être en train de+不定詞”は、ムード性を帯びたアスペクト形式である点において、進行アスペクト形式として普遍的地位を占めている英語の進行形や日本語の「Vテイル(トコロダ)」とは異なる。英語の進行形は、島岡 1990 : 186、191 が 17 世紀以後に俗語の中において一般化したとしているように、“être en train de+不定詞”をはじめとする進行アスペクト形式が普遍的地位を占めるにいたっていないフランス語とは異なる方向に発展していった。フランス語においては、現在形が進行を表わす形式として今なお主要な地位を占めている。フランス語進行表現のこのような変遷過程からは、ムード的手段、アスペクト的手段が並存し、アスペクト的手段自身もムード性を帯びる中国語進行表現の分析に対する有用なヒントが得られよう。

注

38) アスペクトとムード(モダリティ)が相互に関連する点については、青木 1987 : 21、小熊 1993 : 139、172、副島 2007 : 61、木村 2012 : 154 を参照。

39) 同様の記述がコムリー 1988 : 157 にみられる。学習者向けのテキスト・参考書にも、動作が進行中であることを強調したい時に用いられるとする藤田／清藤 2002 : 87 や、継続中の動作であることを明示する働きをすると述べている久松 2011 : 154-155 などがみられる。

40) 但し青木 1987 : 20 は、話者の意志を表わす“Bon, j' y vais.”、

相手への命令を表わす“Toi, tu restes là.”のようなモーダルな発話を“être en train de+不定詞”で置き換えることはできないとしている。

41) 『フランス文法大全』: 281 が、フランス語には「現在進行形」という形がないので、(直説法)現在がそのために使われるとしていることから、“être en train de+不定詞”が進行表現を構成する成分として英語の進行形のような普遍的地位を占めているわけではないことがみてとれる。ちなみに島岡 1990 : 191 は、継続を強調する“être en train de+不定詞”に対して英語の“be in the course of …ing”が対応する“**Il est en train d' écrire une lettre.** / **He is in the course of writing** (a letter). (成戸 2013 の(30))”のような例を挙げている。

42) この点については、さらに楠本 2000 : 81、小林 2001 : 17-19 を参照。

43) 後者のケースと異なる点については、「ル／タトコロダ」における「トコロダ」の働きを考えれば容易に理解されよう。ちなみに青木 2000 : 79 は、「今、勉強し**テイルトコロデス**。」における「トコロ」の用法を「助動詞的用法」と位置づけている。

44) “être en train de+不定詞”、「テイルトコロダ」が有するこのようなムード性が、話者による非難のニュアンスを含むなどの形で具現化するケースについての記述が小熊 1993 : 140-142、172 にみられる。ちなみに小熊 1993 : 140、青木 2000 : 98 には、発話時において動作がまだ終わっていないことを視野に入れた場合に「テイルトコロダ」が用いられる点についての指摘がみられる。

45) この点については、金田一 1976 : 42、小熊 1993 : 142、150、成戸 2009 : 309-310 を参照。「テイル」が表わす進行、状態については、寺村 1984 : 127-128、森山 1987 : 50-51 を参照。ちなみに、「テイル」が動作の進行、動作の結果状態のいずれを表わすかに対して、「Vテイル」と組み合わせられる名詞が「デ」格、「ニ」格、「ヲ」格のいずれをとるかが影響するケースも存在する。この点については中右 1980 : 112-113、成戸 2009 : 304-307 を参照。

46) 但し、成戸 2013 の 2.2 で述べたように、本稿は“(V)着”をアスペクト形式と断定するのは困難であるとの立場をとる。“在(V)”表現のムード性については、さらに王学群 2002 : 84-85 を参照。ちなみに、鈴木 1956 : 9-10、伊原 1982 : 2-3、神田 1989 : 30 には、空間表現との関わりを通しての進行表現のムード性についての記述がみられる。

47) 《法語 1》: 240 は、動作の連続を前提とする“être en train de faire qch”の説明を、“-着”を用いない“正在做某事”によって行なっている。

- 48) 成戸 2013 の注 11 を参照。“我**正**吃饭**呢**。(成戸 2013 の (12))”においては動作が時間軸上の点に位置するものとして表現されており、これに対応する英語表現として大原 1973 : 23 は “I **am eating** right now.” を挙げている。
- 49) 『フランス文法大全』: 284 は、直説法半過去の用法の一つとして「他の事実が起ったとき、または起っていたとき進行中であった事実」を表わすことを挙げ、この用法は過去の進行形であるとしている。久松 1999 : 78 も同様に、半過去は主に英語の過去進行形「～していた」に相当する時制であるとしている。
- 50) 『現代フランス広文典』: 228 には、「未完了動詞(verbe imparfaitif)」とは継続的行為を表わす動詞であり、瞬間的行為を表わす「完了動詞(verbe perfectif)」に対する概念である旨の記述がみられる。
- 51) この点については、さらに『新フランス文法事典 (“imparfait de l'indicatif [直説法半過去形]”の項)』、『フランス語学小事典(「時制(temps)」の項)』を参照。『フランス文法大全』: 253 は、半過去形を用いた表現を “être en train de + 不定詞” 表現と同じく「継続相(aspect duratif)」を表わすものとしてあつかっている。
- 52) 同書はそのような場合の例として “Quand je **suis rentré** chez moi, ma nièce **faisait** ses devoirs. (帰宅したとき、姪は宿題をしていた。)” を挙げている。『フランス文法大全』: 283 にも同様の記述がみられ、imparfait は「過去のある時期にまだ完了していない過去の行為・状態を表わす形」であるとしている。半過去形が未完了あるいは未完結の動作を表わす形式である点については、さらに渡瀬 1998 : 9、18、島岡 1999 : 621-624、627 を参照。
- 53) “呢”を用いた表現、半過去形を用いた表現と話し言葉・書き言葉との関わりについては、陳淑梅 1997 : 32、『現代フランス広文典』: 254 を参照。
- 54) 同様の記述が島岡 1999 : 622、『新フランス文法事典 (“imparfait de l'indicatif [直説法半過去形]”の項)』にもみられる。渡瀬 1998 : 12 は、半過去には事態の＜終結＞点を取り込むための積極的な意味特性が欠けており、事態を最も単純な形で、その時それが発生しているという点からのみ眺め、それ以外の一切(事態の終結点を含め)を関知しない形式であるとしている。
- 55) 『フランス語学小事典(「半過去(imparfait)」の項)』、村松 1988 a : 41-42 の記述からも、フランス語動詞の半過去形と中国語 “V 着” との相似点がみてとれる。すなわち、注 52 で挙げた表現例における “faisait” は、帰宅した時点を含む一定の時間行なわれていた行為を表わし、“社长跟客人谈着话。”のような “-着” を用いた表現は、発話時点を含むある一定の幅をもった時間、事象が既然の状態にあると話し手がとらえていることを表わしているという点である。
- 56) この点については、さらに渡瀬 1998 : 9-10、15-17、『現代フランス広文典』: 255、『フランス文法大全』: 285、287 を参照。
- 57) 荒川 1984 : 7、王学群 2001 : 71-75、同 2002 : 79、87、肖奚强 2002:31-32 には “V 着” 表現の描写性および “在 V” との相違についての記述がみられる。成戸 2009 : 340-344 においては、“在・トコロ + V 着” 表現が “在・トコロ + V” 表現に比べ描写性が強い点について述べた。ちなみに、“V 着” 表現の描写性については、進行の形式である “(正)在 V” 表現との対比において問題とする上記のような記述がみられる一方、半過去形を用いた表現の描写性については、いわゆる単純過去や複合過去という非進行の形式を用いた表現との対比において問題とする『現代フランス広文典』: 255、『フランス文法大全』: 285、287 がみられる。
- 58) 成戸 2013 の注 18 を参照。『新フランス文法事典 (“train” の項)』には、“être en train de + 不定詞” は継続相を表わしえない時制には用いられず、“on **a été** en train de …” は不成立となる旨の記述がみられる。
- 59) 『フランス文法大全』: 284 には、現在形と比較した場合と同様に、“être en train de + 不定詞” によって進行の意識が強化される旨の記述がみられる。
- 60) 鈴木 1972 : 391 は、「テイタトコロダ」は動作の進行中の状態であったことを表わすとしている。
- 61) この点については『現代フランス広文典』: 255 を参照。久松 2011:282 は、複合過去は過去の 1 点をとらえた時制であるのに対し、半過去は点の連続＝線をとらえた時制であるとする一方、これらの「点と線」は客観的基準ではなく話者の視点(主観)によって切りとられるものであるとしている。
- 62) 佐藤 2005 : 96 には、動詞が表わす行為は、複合過去形を用いた表現においては 1 回の出来事として表わされているのに対し、半過去形を用いた表現においては “Il **chantait** souvent. (彼はよく歌っていました。)” のように、何度も反復された習慣として表わされるケースが存在する旨の記述がみられる。
- 63) この点については注 55 および村松 1988 b : 84 を参照。
- 64) (96) と同様の例としては、『新フランス文法事典 (“imparfait de l'indicatif [直説法半過去形]”の項)』の “Or, cette année-là, aux Rois, il **neigeait** depuis une semaine. (さて、その年の公現節には、1 週間前から雪が降っていた。)”、“Je t' **attendais** depuis

longtemps.（ずいぶん前からお前を待っていたのだよ。）”のような表現が挙げられる。

- 65) この点については、大原 1973：22-23、《外国人学汉语难点释疑》：164-166 を参照。“（V）着”と“呢”が併用された表現の中には、例えば“他穿着大衣呢。（《外国人学汉语难点释疑》：167-168）”のように動作結果の持続状態を表わすケースも存在する。
- 66) フランス語動詞の半過去形と中国語の“V着”は、いずれも動作の開始・終了を問題としない形式である一方、前者はアスペクト性を有する時制の形式であるとされるのに対し、後者はアスペクト形式であるとは認めがたいということからは、アスペクトの概念規定における課題がみてとれよう。日本語の「テイル」の働きについて、金田一 1976：45 が「この道は曲っテイル。」のような動作・作用の起りに全く無関係である（従って起り終りということが考えられない）ものをアスペクトの中に入れることに対する疑問を呈していることから、アスペクトの概念規定の難しさがうかがわれる。

参考文献

- 青木三郎 1987. 「現代仏語のアスペクト・テンス・モダリティー — “être en train de+infinitif” と現在形について —」, 『フランス語学研究』第 21 号, 日本フランス語学研究会, 20-35 頁。
- 青木三郎 1989. 「文法の対照的研究 — フランス語と日本語 —」, 山口佳紀編集『講座 日本語と日本語教育 第 5 巻 日本語の文法・文体(下)』, 明治書院, 290-311 頁。
- 青木三郎 2000. 「<ところ>の文法化」, 青木三郎／竹沢幸一編『空間表現と文法』, くろしお出版, 77-103 頁。
- 朝倉季雄『新フランス文法事典』, 白水社(2002)。
- 荒川清秀 1984. 「～テイルの諸相」, 『中国語』1984 年 8 月号, 大修館書店, 7 頁。
- 伊原大策 1982. 「進行を表す『在』について」, 『中国語学』第 229 号, 中国語学会, 1-11 頁。
- 王学群 2001. 「地の文における“V 着(zhe)”のふるまいについて」, 『日中言語対照研究論集』第 3 号, 日中言語対照研究会(白帝社), 60-80 頁。
- 王学群 2002. 「会話文における“V 着”と“在(…)V”のふるまいについて」, 『日中言語対照研究論集』第 4 号, 日中言語対照研究会(白帝社), 72-90 頁。
- 大原信一 1973. 『中国語と英語』, 光生館(再版 1978)。
- 小熊和郎 1993. 「トコロダと aller, venir de, être en train de+infinitif — アスペクトとモダリティーの関連を巡って —」, 『西南学院大学フランス語フランス文学論集』第 29 号, 139-175 頁。
- 神田千冬 1989. 「進行・持続表現における“在”と“着”の機能分化傾向について」, 『中国語』1989 年 8 月号, 大修館書店, 28-31 頁。
- 木村英樹 2012. 『中国語文法の意味とかたち — “虚”の意味の形態化と構造化に関する研究 —』, 白帝社。
- 金田一春彦 1976. 「日本語動詞のテンスとアスペクト」, 金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』, むぎ書房(1976), 27-61 頁。
- 楠本徹也 2000. 「トコロの意味と機能に関する一考察」, 『東京外国語大学 留学生日本語教育センター論集』第 26 号, 東京外国語大学留学生日本語教育センター, 77-87 頁。
- 小林幸江 2001. 「『ところだ』の意味と用法」, 『東京外国語大学 留学生日本語教育センター論集』第 27 号, 東京外国語大学留学生日本語教育センター, 17-31 頁。
- 佐藤康 2005. 『フランス語のしくみ』, 白水社。
- 讃井唯允 1996 a. 「語気助詞“呢”・時間副詞“在”およびアスペクト助詞“着”」, 『中国語』1996 年 6 月号, 内山書店, 28-31 頁。
- 讃井唯允 1996 b. 「アスペクトとテンス」, 『中国語』1996 年 4 月号, 内山書店, 56-59 頁。
- 讃井唯允 2000. 「“在等”“等着”“在等着” — “在”と“着”の文法的意味と語用論」, 『人文学報』第 311 号, 東京都立大学人文学部, 53-73 頁。
- 島岡茂 1990. 『英仏比較文法』, 大学書林。
- 島岡茂 1999. 『フランス語統辞論』, 大学書林。
- 鈴木重幸 1972. 『日本語文法・形態論』, むぎ書房。
- 鈴木直治 1956. 「中国語における位置の指示と強調のモードとの関係について」, 『中国語学』第 57 号, 江南書院, 8-14 頁。
- 副島健作 2007. 『ひつじ研究叢書<言語編>第 44 巻 日本語のアスペクト体系の研究』, ひつじ書房。
- 田辺貞之助 2007. 『フランス文法大全』, 白水社。
- 陳淑梅 1997. 「『～テイル』の中国語訳についての一考察」, 『慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化コミュニケーション』第 19 号, 23-33 頁。
- 恒川邦夫／牛場曉夫／吉田城編『プチ・ロワイヤル和仏辞典』, 旺文社(3 版 2010)。
- 寺村秀夫 1984. 『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』, くろしお出版。
- 寺村秀夫 1992. 「『トコロ』の意味と機能」, 『寺村秀夫論文集 I — 日本語文法編 —』, くろしお出版, 321-336 頁。
- 藤堂明保／相原茂 1985. 『新訂 中国語概論』, 大修館書店。
- 中右実 1980. 「テンス、アスペクトの比較」, 國廣哲彌編集『日英語比較講座 第 2 巻 文法』, 大修館書店(3 版 1982),

101-155 頁。

中村敦子 2001. 『音読仏単語¹ 日常生活編』, 第三書房。

成戸浩嗣 2009. 『トコロ(空間)表現をめぐる日中対照研究』, 好文出版。

成戸浩嗣 2013. 「フランス語の進行表現にみられる諸相(1) — 中国語・日本語の視点から —」, 『現代マネジメント学部紀要』第1巻第2号, 愛知学泉大学現代マネジメント学部, 1-15 頁。

新倉俊一／朝比奈誼／稲生永／井村順一／富永明夫／宮原信／山本顕一 1996. 『改訂版 フランス語ハンドブック』, 白水社。

西村牧夫／鳥居正文／中井珠子／飯田良子／曾我祐典／菊地歌子／井本秀剛／増田一夫編訳『ロベール・クレ仏和辞典』, 駿河台出版社(2011)。

バーナード・コムリー著／山田小枝訳『アспект』, むぎ書房(1988)。

髭郁彦／川島浩一郎／渡邊淳也編著『フランス語学小事典』, 駿河台出版社(2011)。

久松健一 1999. 『英語がわかればフランス語はできる!』, 駿河台出版社。

久松健一 2002. 『英仏日 CD 付 これは似ている! 英仏基本構文 100+95』, 駿河台出版社。

久松健一 2011. 『ケータイ〔万能〕フランス語文法 実践講義ノート』, 駿河台出版社。

藤田裕二／清藤多加子 2002. 『英語もフランス語も 比較で学ぶ会話と文法』, 評論社。

船田秀佳 2003. 『英語がわかれば中国語はできる』, 駿河台出版社。

村松恵子 1988 a. 「— 日・中語対照研究 — 日本語の『〜テイル』の表現と, 中国語の“-着”の表現」, 『ことばの科学』第1号, 名古屋大学総合言語センター・言語文化研究委員会, 39-61 頁。

村松恵子 1988 b. 「“着”の文法的意味」, 『中国語学』第235号, 中国語学会, 76-85 頁。

目黒士門 2000. 『現代フランス広文典』, 白水社。

森本英夫 1988. 『フランス語の社会学 — フランス語史への誘い —』, 駿河台出版社(再版 1991)。

森山卓郎 1987. 「アспект」, 寺村秀夫／鈴木泰／野田尚史／矢澤真人編集『ケーススタディ 日本文法』, おうふう, 50-55 頁。

刘月华・潘文娛・故犇著／相原茂監訳『現代中国語文法総覧(上)』, くろしお出版(1988)。

渡瀬嘉郎 1998. 「二つの過去形 — 意味の枠組の明確な過去, 枠組のない過去 —」, 東京外国語大学グループ『セメイオン』『フランス語を考える フランス語学の諸問題Ⅱ』, 三

修社, 8-21 頁。

北京外国語大学法語系 馬晓宏／柳利編『法语1』, 外语教学与研究出版社(1992)。

广州外国语学院法语专业『新简明法汉词典』, 商务印书馆(1983)。

刘月华／潘文娛／故犇『实用现代汉语语法』, 外语教学与研究出版社(1983)。

肖奚强 2002. 「“正(在)”、“在”与“着”功能比较研究」, 『语言研究』2002 年第4期, 华中科技大学中国语言研究所, 27-34 頁。

徐士珍編『英汉语比较语法』, 河南教育出版社(1985)。

叶盼云／吴中伟編著『外国人学汉语难点释疑』, 北京语言文化大学出版社(1999)。

張道眞編著『實用英語語法(修訂本)』, 商務印書館香港分館(1978)。

用例出典

『NHK ラジオ フランス語講座』2003 年9月号, 日本放送出版協会。(略称 NHK)

(原稿受理年月日 2013 年9月13 日)